

3 調査結果のまとめと考察

(1) Uターン・Iターン状況とその理由

Uターン・Iターン別では、Uターンによる転入がIターンより4.4倍多かった。どこからの転入かをみると、いずれも関東以北からの転入者が大半を占め、関東以西からの転入者は少なかった。

次に、転入した時期については、各時期とも大きな特徴は見られなかったが、Uターンでは「10年前」が17.4%と最も多く、次いで「1年未満」が8.5%、「5年前」が6.8%と続き、Iターンでは同じく「10年前」が20.8%と最も多く、次いで「1年未満」が9.4%、「2年前」が9.4%と同数で続いた。

双方に転入の理由を問うと、Uターンでは「就職関連」が最も多く、次いで「地元に戻りたかった」「家族のため」「家族の介護」「退職」「離婚」「体調を崩した」が続いた。

Iターンでは「結婚のため」が最も多く、次いで「就職」「大学進学・入学」「転職」「夫のUターン」「転勤」「仕事の都合」と続いた。

<小括>

Uターン・Iターンの状況から、その理由について調査結果から考察した。

県内出身者のUターンのタイミングは、学校卒業時の就職選択の時期が最も多く、次に「地元に戻りたかった」「家族のため」「家族の介護」などの状況が生じた時となっている。

自由記述からは、親や友人たちへの思いや地元に対する愛着などから「地元に戻りたい」という希望が少なくないことがうかがえた。

(2) 県外へ転出した理由

県外へ転出した理由を問うと、「進学のため」が74.5%と最も多く、次いで「就職のため」が29.6%、「県外に出たかったから」が24.7%と続いた。

自由記述からは、「県外願望」によるものが最も多く、次いで「転勤」によるものであったが、「しがらみを煩わしく感じていた」「人間関係をリセットしたかった」という生活環境の息苦しさからの解放を求めているものもあった。

転出理由として最も多かった「進学のため」とした人の、県外の教育機関を選んだ理由は、「県外に学びたい大学・専門学校等があった」が80.7%と最も多く、次いで「親元を離れて暮らしたかった」が46.4%、「学業以外に楽しめる場所や機会が多そうだった」が40.9%と続いた。

自由記述からは、「選択肢が少ない」が最も多く、次いで「生活環境に不満」「県外に出たかった」と続いた。

転出理由として2番目に多かった「就職のため」とした人の県外を選んだ理由は、「県外に働きたい場所があった」が45.1%と最も多く、次いで「都会で暮らしたかった」「親元を離れて暮らしたかった」が35.2%と同数であった。

自由記述からは、「就職先の問題」が最も多く、次いで「生活環境に不満」「県外に出たかった」がこれに続いた。

<小括>

県内出身者における出身地からの転出移動について、調査結果から考察した。

青森県からの転出は、進学や就職に伴う移動が大半を占め、その理由として希望する進学先や就職先が県内になかったことが大半を占めた。次いで「親元を離れて暮らしたかった」「都会で暮らしたかった」が双方とも上位に挙がった。

進学を理由とした転出については、「県外に学びたい大学・専門学校等があった」といった、県内における選択肢の少なさを理由とするものが主であり、「親元を離れて暮らしたかった」「都会で暮らしたかった」「生活環境に不満」などの生活環境についての選択も加わった結果であると考えられる。

就職を理由とした転出については、「県外に働きたい場所があった」といった、県内における選択肢の少なさを理由とするものが主であったが、進学と同様に「親元を離れて暮らしたかった」「都会で暮らしたかった」「生活環境に不満」などの生活環境についての選択も加わった結果であると考えられる。

進学及び就職において、「学業や仕事以外に楽しめる場所や機会が多そうだった」という理由も多く、若者が行きたくなるような遊興施設や商業施設を希望する声もみられた。

以上のことから、女性の県外への転出については、まずは進学時における選択肢の少なさと生活環境における選択の結果もたらされ、次に就職時における地元の選択肢の少なさと生活環境における選択の結果もたらされたものであることがうかがえる。

(3) なぜ県外に出る女性が多いと思うか

今なぜ県外に出る女性が多いと思うかとの問いでは、「経済的魅力に乏しい」が 85.6%と最も多く、次いで「閉鎖的」が 44.7%、「古くからの慣習やしきたりに縛られたくない」が 40.2%と続いた。

自由記述からは、「働きたい企業数・ジャンル・選択肢が少ない」ことを挙げたものが最も多く、次いで「冬が厳しい・雪が多い・寒い」、「商業施設・遊興施設が少ない」などが続いた。

<小括>

今なぜ県外に出る女性が多いのかについて、調査結果から考察した。

青森県からの女性の転出の原因については、「経済的魅力に乏しい」ことが圧倒的に多く、次に「閉鎖的」「古くからの慣習やしきたりに縛られたくない」があげられた。

「経済的魅力に乏しい」に関しては、県内における女性の賃金の低さが影響していた。

次に多く挙げられていた「閉鎖的」「古くからの慣習やしきたりに縛られたくない」については、固定的役割分担意識および無意識の偏見によるものであることがうかがえた。

(4) 青森で暮らす魅力は何か

青森で暮らす魅力をたずねると「親族がいる」が 70.7%と最も多く、次いで「自然が豊か」が 60.0%、「慣れた風土」が 46.9%と続いた。

自由記述では「食べ物が豊富でおいしい」が最も多く、次いで「温泉が多い」、面白いお祭り・文化がある」などが続いた。

<小括>

青森で暮らす魅力は何かについて、調査結果から考察した。

青森県で暮らす魅力については、親族がいることが最も多く、次に自然の豊かさや慣れた風土であることがあげられた。

転入の理由からも、地元に戻りたかった理由として親族の影響が大きいことが挙げられていた。

四季の景色や豊かな食材、温泉の多さや好きな文化があることなどもあがっており、それらの複合的要素によりゆったりと暮らせることも魅力となっていることがうかがえた。

(5) 青森で暮らす課題は何か

青森で暮らす課題を尋ねると「雇用機会」が66.4%で最も多く、次いで「まちの過疎化」が64.7%、「高齢化の加速」が60.6%、「娯楽施設の不足」が59.9%と僅差で続いた。

自由記述からは、「生活環境」が最も多く、次いで「住民意識・古い習慣」、「子育て環境」と続いた。

<小括>

青森で暮らす課題について、調査結果から考察した。

青森県で暮らす課題については、「雇用機会」の不足が最も多く、次いで「まちの過疎化」「高齢化の加速」という人口減少による地域の衰退に関すること、更には「娯楽施設の不足」という生活満足度の低下が予想される指摘がなされた。

更に深掘りすると、生活環境の厳しさや古い慣習等による住民意識が問題と捉えられていることが分かった。

雪問題や交通の不便さなどの生活環境に関しては他機関の調査に委ねることとして、ここでは「古い慣習等による住民意識」について探ることとする。

「男尊女卑が根深い。江戸時代かと思うことがある」「男女問わず社会全体が保守的で、変化や新しい価値観や多様性を受け入れづらい面がある」「いろいろな場面でローカルルールがまかり通っていて、びっくりすることが多い」など、ジェンダー・バイアスや無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）による弊害を指摘する内容が多く寄せられた。

(6) 現在の満足度とその理由

現在の生活に対する満足度は、「普通」が39.0%と最も多く、次いで「満足」が38.0%、「不満足」が14.0%であった。

自由記述では、満足度の高い理由の大半は「生活環境」によるもので「ある程度不自由なく生活できているから」という声もあった。

不満足度の高い理由のトップは「生活環境」、「仕事・賃金」等によるものであった。

<小括>

転入者の満足度をその理由と共に、調査結果から考察した。

現在の生活に対する満足度については、不満足と感じているのは2割弱で、大半が普通もしくは満足度が高いことが分かった。

満足度の高い理由としては、生活環境によるものが最も多く、Uターンではその大半を

占めた。

(7) Uターン・Iターンしての感想

青森県に転入しての感想を自由記述から読み解くと、Uターンした人では「良かった」が大半を占め、次いで「悪かった」、「どちらでもない」と続いた。

一方、Iターンした人も「良かった」が大半を占め、「悪かった」、「どちらでもない」が続いた。

<小括>

Uターン・Iターンしての感想を調査結果から考察した。

転入しての感想では、Uターン・Iターンとも「良かった」とするものが大半を占め、「悪かった」としたものが、IターンではUターンより高かった。

自由記述から問題点を探ると、「仕事のなさ・給料の低さ・娯楽施設のなさ・公共交通機関の少なさ・冬の大変さ・教育環境の格差」が浮かび上がった。

(8) 今後の展望

今後の展望について、自由記述を内容別に分類した結果によると「生活・生き方（の選択肢）」をあげたものが大半を占め、次いで「仕事・賃金」、「商業施設・遊興施設」についての声が続いた。

<小括>

転入者の今後の展望についての思いを調査結果からまとめた。

「生活・生き方（の選択肢）」が大半を占めたが、その中でもジェンダー・バイアスや無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）による弊害の改善を求める内容が多かったことに注目したい。

最も多かったのが「女性の多様な生き方・価値観が受け入れられる地域」で、「性別役割分担意識による風潮から少しずつ抜けていく地域」「女性の生きる選択肢が増加する地域」「性差や個性の差によらず、全ての人が人間として尊重される地域」などを望む声が多数寄せられた。

(9) まとめ

本調査では、Uターン・Iターンした女性を対象としたアンケート調査から、女性の県外流出に関する課題を考察した。

他機関の調査においても、女性の県外流出の大きな原因の1つとして、固定的な性別役割分担意識の根強さや無意識の偏見による生きにくさが指摘されており、本調査においてもそのことを裏付ける結果となった。

① 女性の県外流出は経済的魅力から？

なぜ県外に出る女性が多いと思うかについては、経済的魅力に乏しいことが最も多く、次に閉鎖的な社会や古くからの慣習やしきたりに縛られたくないことが挙げられた。

厚生労働省の「令和3年賃金構造基本統計調査」によると、本県の女性の所定内給与額の平均は212,900円となっており、男性の所定内給与額の79.6%となっている。

3 調査結果のまとめと考察

更に全国の女性の所定内給与額の平均は 253,600 円となっており、本県の女性はその 84.0%で 40,700 円低かった。

女性の貧困が問題とされる中、本県においては一層厳しい現実が女性を取り巻いていることが浮き彫りになった。

青森県教育政策課の令和 4 年 5 月 1 日現在の「高等学校等卒業者の進路選択」によると、本県女子の進学率は 54.4%であった。女性にとって大学等への進学が特別なことではなくなっている現在において、学んだ知識やスキルを活かしながら自分らしく生きていきたいと思うのは当然のことのように思われる。本県には、そのような女性の望む仕事や職場が少ないことが大きな要因の一つではないかと思われる。

調査の中でも「一次産業の会社が多く、それ以外だと介護か医療しかなく、女性が活躍できる就職先がない」という声も寄せられた。

また、調査の中で「就職したいと思える就職先があるかもしれないのに探せない」「就職先を知る機会があれば地元に戻りたいという気持ちが強くなると考えられる」という声もあった。地元企業が、本人やその親に知られる機会がないまま、就職活動の際の選択肢に入らないことも課題と思われる。

② 閉鎖的な社会・古くからの慣習やしきたりに対する拒否感

次に挙がっていた閉鎖的な社会や古くからの慣習やしきたりについては、「男尊女卑が根深い。江戸時代かと思うことがある」「外部を受け入れない地域性」「色々な場面でローカルルールがまかり通っていて、びっくりすることが多い」など、固定的な性別役割分担意識や無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）による生きづらさを訴える切実な内容が自由記述に多くあった。

③ 転入のカギは親族との関係

転入理由として「就職」の次に挙げられた「地元に戻りたかった理由」の多くは、親族がいることであった。青森で暮らす一番の魅力も同様であり、そのことがある程度不自由なく生活できていることに繋がっている場合も見受けられた。

④ 転出のタイミングは進学・就職時

一方、県外へ転出した理由については、進学・就職のためが圧倒的に多く、その理由としては県外に働きたい職場や学びたい学校があったというものが最も多かった。

次に、「親元を離れて暮らしたかった」が挙げられていた。このことについては、一般的な独立心によるものなのか、親元で暮らす不自由さによるものなのか、今回の調査でははっきりとはわからなかった。

⑤ 青森で暮らす課題は雇用機会の不足

青森で暮らす課題については、雇用機会の不足が最も多く、まちの過疎化や高齢化の加速に加え、娯楽施設の不足も挙げられた。生活満足度を高めるために、娯楽施設や商業施設を求める声も多かった。

⑥ 女性の県内定着のカギは固定的性別役割分担意識からの脱却

本調査の結果、女性の県外流出に関する対策として、少子化対策を前提にした取り組

3 調査結果のまとめと考察

みでは根本的な解決には繋がらないであろうことが予想された。若い女性の定着を図り、結婚して子どもを産み育てることに期待し、人口減少に歯止めをかけたいということであれば、女性の心をつかむことは難しいであろう。一人ひとりの多様性を尊重し自分らしくイキイキと生きることを応援するような地域社会であれば、自然と生活満足度も高まり地元で暮らそうと思う女性も増えるのではないかと思われる。

将来に渡って持続可能な地域づくりのために、私たち一人ひとりが無意識の偏見に気づき、固定的性別役割分担意識を改めていくことが、女性の県外流出に歯止めをかける近道ではないかと考える。